

「事実」を語ること

——芥川龍之介「猿蟹合戦」——

佐藤元紀

一

芥川龍之介「猿蟹合戦」⁽¹⁾が発表された頃、国民教育の場で使用されていた第三期国定国語教科書『尋常小学国語読本 巻一』⁽²⁾には「サルトカニ」が掲載されていた。「サルトカニ」が初めて採用された第二期国定国語教科書（明治43年より使用）は、日露戦争勝利を社会的な背景としたナショナリズムの高揚を受け、国民精神を涵養するための復古的傾向を強めた内容となっていた。⁽³⁾後述するが、それにより「復讐禁止令」（太政官布告第三十七号、明治6年2月7日公布）による公刑罰権の確立以来、近代法治国家において禁止されてきた仇討は、美談の仇討譚⁽⁴⁾「サルトカニ」として国民教育の場に姿を現すことになった。そして日露戦争後の社会情勢を背景として、イデオロギーを背負わされた「サルトカニ」は、「自治、責任、及び創造新時代の教育の原則はこの三位一体を教育上に実現するにある」⁽⁵⁾と児童の主体性確立を目指した大正期の児童中心主義による新教育運動下の第三期国定国語教科書では長文化されて掲載された。それにより親の仇討を義務とした江戸期の価値観を利用して国民を

作り上げた「サルトカニ」は形骸化され、新教育運動に適応する教材へと様変わりしたのである。そこに日露戦争後の国民思想に彩られてきた「サルトカニ」の理解と、第一次大戦後の大正期における理解との差異が生じたのだと言えよう。日露戦争勝利を契機とした国民国家意識増強の要請から教科書へと姿を現した仇討が、第一次大戦を経て〈近代〉を改めて問い直す段階に至った同時代において、近代法が支配する「国家」の論理に反するものと冷静に映るようになったところで、芥川「猿蟹合戦」は書かれているのである。そして「コガニ ガサル ノ クビ ヲ ハサミキリマシタ」という残酷な結末は「教育界の重大問題」⁽⁶⁾として問題視されるようになり、昭和8年より使用された第四期国定国語教科書『小学国語読本 巻二』での改変を余儀なくされた。

従来「猿蟹合戦」は「子供の豊かな心を育てるための童話の虚構性を剥奪し、現実世界の冷酷な真相を直視していく内容」⁽⁷⁾や、一連の芥川作品に見られる「バランステスト」的な読みを可能とするパロディ作品⁽⁸⁾であることを前提として理解されてきた。確かに「蟹の泡を拭つてやりながら、「あきらめ給へ」と云つた」「弁護士」や「猿に尿をかけられたことを遺恨に思つてゐた」「某代議士」の件、そして「蟹の家庭」の末路など、批評を内在するパロディとしての要

素を「猿蟹合戦」は持ち得た作品となっている。しかし、芥川は「猿蟹合戦」を「サルトカニ」の単なるパロディではなく、それを「偽」だと明言することにより、「読者」に「事実」を説明するメタファ^⑨ーとして機能させているのではないだろうか。また、「警察や裁判所」、「新聞というマスコミ」、「識者」により「無知な一般市民が犠牲になる」ということを示している^⑩と、社会と「一般市民」とを対比する枠組みの中でも「猿蟹合戦」は評価されてきたが、本文中にて芥川が想定する「読者」が「一般市民」まで拡大可能か否かは留意されねばならない。しかし、「センチメンタリズム」でしか蟹の死刑を捉えられず、「事実」に即すことの出来ない「読者」の盲目さを難しながらも、却ってそれ故に「君だちも大抵蟹なんですよ」と同情の眼差しを向ける語り手を考えれば、社会の中で「一般市民」が犠牲になるという枠組みの提示が「猿蟹合戦」における問題ではないことは明瞭である。

問題は「センチメンタリズム」が優先されることにより、「事実」が覆い隠されてしまうことであり、それに無自覚な「読者」に向けて法に則した「事実」を説明する語りにより「猿蟹合戦」が書かれていることにある。そのために、「児童のことばによつて児童の思考、感動、意志^⑪」を育もうとする同時代の児童中心主義の新教育運動の中で読まれた「サルトカニ」は恰好の材料だったと考えられないだろうか。

そこで本稿では、「猿蟹合戦」を同時代の社会や人々に対する批評性を有したパロディ作品であるという前提を取り払い、国民思想を涵養する教育の場で形成されてきた子蟹による「カタキウチ」の

美談を、法治国家の論理に従つて「時代遅れ」甚だしい「偽」の「お伽噺」と言い放ち、「主犯」として蟹が裁かれ、「蟹の家庭」が崩壊して行く様を「事実」の説明として「読者」に語った——「サルトカニ」を「事実」の説明として利用した——芥川の意図を問題としたい。「猿蟹合戦」を一般大衆向けられた語りではなく、芥川の想定する「読者」への語りかけに留め、「読者」に同情を示すかのような言葉で締めくくることがにより、パロディの批評性を取って後退させ、パラドキシカルにパロディ作品が孕む批評性が機能不全を起こしている現状に対する批評として機能させられているのではないだろうか。

二

芥川「猿蟹合戦」は、先述したように国定教科書に掲載された「サルトカニ」を「お伽噺」＝「偽」として退け、「事実」を語り直すところから始められる。

恰も蟹は穴の中に、白は台所の土間の隅に、蜂は軒先の蜂の巢に、卵は初殻の箱の中に、太平無事な生涯でも送つたかのやうに装つてゐる。／＼しかしそれは偽である。彼等は仇を取つた後、警官の捕縛するところとなり、悉監獄に投ぜられた。しかも裁判を重ねた結果、主犯蟹は死刑になり、白、蜂、卵等の共犯は無期徒刑の宣告を受けたのである。お伽噺のみしか知らない読者はかう云ふ彼等の運命に、怪訝の念を持つかもしれない。が、これは事実である。寸毫も疑ひのない事実である。

ここで語り手の主眼は、「お伽噺」として知られている「サルトカニ」の本筋を語ることにあるのではなく、仇討を成し遂げた蟹たちが遂着した運命、即ち後日談として蟹の死刑を「気の毒と」「センチメンタリズム」から判断する「お伽噺のみしか知らない読者」に語り、同時代に即した「事実」を示すことにある。後日談を語らず、蟹たちが「太平無事な生涯でも送つたかのやうに装つてゐる」「お伽噺」を「偽」だと言い切り、現実的な眼を曇らせる「センチメンタリズム」により仇討を美談とする認識に対し、「裁判」が下した蟹の死刑を「寸毫も疑ひのない事実」として突きつけることにより、「読者」に「事実」を目の当たりにさせることが可能となる。それは「情」に訴えかける仇討が結果として行動への当為を含むやうに、「情」に留めることを良しとしない強制力を有する法が統治する同時代の「事実」を「読者」に与えることに他ならない。

明治6年2月、当時の司法卿江藤新平が司法制度整備の一環として布告した「復讐禁止令」(太政官布告第三十七号)は次のように「復讐」を定めた。

人ヲ殺スハ国家ノ大禁ニシテ人ヲ殺ス者ヲ罰スルハ政府ノ公権ニ候処古来ヨリ父兄ノ為ニ讐ヲ復スルヲ以テ子弟ノ義務トナスノ風習アリ右ハ至情不得止ニ出ルト雖トモ畢竟私憤ヲ以テ大禁ヲ破リ私義ヲ以テ公権ヲ犯ス者ニシテ固擅殺ノ罪ヲ免レヌ加之甚シキニ至リテハ其事ノ故誤ヲ問ハス其理ノ当否ヲ顧ミス復讐ノ名義ヲ挾ミ濫リニ相構害スルノ弊往々有之甚以相不濟事ニ候依之復讐嚴禁被仰出候條今後不幸至親ヲ害セラル、者於有之ハ事實ヲ詳ニシ速ニ其筋ヘ可訴出候若無其儀旧習ニ泥ミ擅殺スル

ニ於テハ相当ノ罪科ニ可処候條心得違無之様可致事

この法文により、「古来ヨリ父兄ノ為ニ讐ヲ復スルヲ以テ子弟ノ義務トナスノ風習」として正当化されてきた「復讐」の権利は「公権」へと帰属されるようになった。そして「人ヲ殺スハ国家ノ大禁ニシテ人ヲ殺ス者ヲ罰スルハ政府ノ公権」と明記されることにより、江戸期まで「子弟ノ義務」とされてきた仇討の「風習」は、「国家」が「親ヲ害セラル、者」の代わりに法に従つて下す刑罰へと変容したのである。故に「情」が向かうベクトルは仇討から法による裁きへと切り替えられ、それに反して「私義ヲ以テ、公権ヲ犯」した蟹は「天下」により罰せられることとなったのである。

即ち「猿蟹合戦」が示したのは、仇討を遂げた「主犯蟹は死刑になり、白、蜂、卵等の共犯は無期徒刑の宣告を受けた」という「復讐禁止令」に則した「事実」であり、「子弟ノ義務」として仇討を成し遂げた「お伽噺」の子蟹が、触法行為を犯した「主犯蟹」として極刑に処せられた「事実」なのである。「読者」が「サルトカニ」に向かう時、近代法の拘束力による「事実」は「お伽噺」という枠の前で効力を失い、「事実」とは乖離した勧善懲惡の「噺」として受容される。かかる寓話としては読まれ得ない「サルトカニ」を芥川は「事実」の説明として用いたのである。

更に、法に則した「事実」は、事の発端である猿と蟹の「握り飯」と「柿」を交換する口約束を蟹の「証書」取り交わし不備として処理する。

蟹は蟹自身の言によれば、握り飯を柿と交換した。が、猿は熟柿を与へず、青柿ばかり与へたのみか、蟹に傷害を加へるやう

に、さんざんその柿を投げつけたと云ふ。しかし蟹は猿との間に、一通の証書も取り換はしてゐない。よし又それは不問に附しても、握り飯と柿と交換したと云ひ、熟柿とは特に断つてゐない。最後に青柿を投げつけられたと云ふのも、猿に悪意があったかどうか、その辺の証拠は不十分である。

語り手は蟹の証言が「証書」の取り交わしをしていないこと、「熟柿」との交換を約束していないことの二点から棄却されるべきものであると語る。法に晒された時、猿との契約を「証書」によって交わしていなかった蟹の不備が問題となり、形式的に契約の成立を示す「証書」の存在が極めて重要となる。故に、蟹の正当性と猿の非を立証する証拠の不足により「蟹の弁護に立つた、雄弁の名の高い某弁護士」までも蟹を弁護する手立てを失い、「あきらめ給へ」と、法が拵える「事実」の受け入れを蟹に促して宥めるしかなかったのだと言えよう。本来ならば猿を有罪へと追い込むはずの「某弁護士」が手を上げたように、法の前で蟹は正当性を立証できず、「お伽噺」はいとも容易に「偽」へと転じてしまふ。それにより、語り手は「情」で納得されてきたものが法の理により否定される過程を「読者」に提示する。そして一方的に「青柿」を投げつけた猿を悪と決めつける「お伽噺」に対して、証拠不十分のため「猿に悪意があつたかどうか」という善悪の判断を「情」に従つて下すことを留保することにより、「読者」を法的「事実」へと導くのである。先の「復讐禁止令」にも「事実ヲ詳ニシ」とあるように、「情」による「風習」よりも、事実関係を示す証拠の積み重ねにより「近代」を司る法という理は動く。それを容易に蟹への同情を示さない語り手の態度が

物語つていると言えよう。

このように「子弟ノ義務」とされてきた仇討による「復讐」が「公権」による刑罰へと姿を変えたことにより、証拠不足のため法による裁断要件を満たさない蟹は、「事実」として猿を罰することもできない。それどころか、却つて「旧習ニ泥ミ擅殺」したことの「相当ノ罪科」として死刑に処され、近代法に則した「事実」の中で、「お伽噺」の英雄たる蟹は「主犯蟹」へと様変わりを遂げる。

それに対して語り手は「蟹の死は当然」と客観的な見解を投げ掛けることにより、いつまでも「センチメンタリズム」から「同情の涙」を落とし「事実」を見ようとしないう「読者」に、「事実」を見る冷静な眼を示したのだと言えよう。

さて、「サルトカニ」という「お伽噺」の受容過程を見るだけでも、仇討を「子弟ノ義務」とした江戸期、それを法により「公権」に帰属させて禁止した（近代）化を進めた頃の明治期、国民を感化するため忠君愛国の理として仇討譚を機能させた日露戦争後の時代、そして芥川が「猿蟹合戦」を発表した第一次大戦後の大正期の同時代とでは、人々を規律する理の大きな変容があつた。

たとえば同時代において恒藤恭^{（註）}は「人間の社会生活の複雑多様な構造の一要素」として法を捉え、「社会と共に生き、歴史と共に成長する」法の必要性を主張した。そして「法律の本質は規範たることにある」と、新カント派哲学が示す実在と価値を峻別し対立するものとする方法二元論に拠りながら、経験的規範たる法を超越した先験的規範の存在を重視し、「社会の構成員としての立場から正しく評価作用を行ふことによつて把握する価値」としての「正義」

「倫理観を法律の本質とした。故に恒藤は、法を司る「価値」たる「正義」が時代の変化と共に変容するように、現在の「社会と共に生き」、「現実の世界に確固として立脚」し、社会や人々の生活を規律し得る「生きた法律」を掲げ、形骸化した法律制度からの脱却を求めたのである。この「生きた法律」の登場により、法は単なる規律ではなく、時代の鏡としての機能を与えられるようになったと言えよう。

かかる法律観は、仇討が「猿蟹合戦」の中で通用しないとされていることの意味を明確にする。即ち、その時代毎の「正義」を規範とする恒藤式の「社会と共に生き」る法の在り方は、江戸期の忠孝を規範として成立していた仇討が、大正期の「正義」にそぐわないために「輿論」から非難され、蟹が猿を殺めた事件として処理されたように、事の真相に変化はなくとも、規範の変化により規律される「事実」が変化すること——「事実」と「偽」の転倒——を容認する。そうした規範の変化に伴う「事実」の変化を「猿蟹合戦」は物語っているのである。近代法を自覚的且つ冷静に捉える眼を備えた語り手から見た時、蟹の行為は法を踏み外した愚行と映ってしまふ理由はそこにある。

以上のように、「お伽噺」の「サルトカニ」が「偽」であると語られた背景には、江戸期における「事実」を規範する「正義」や、明治期の法や忠君愛国の国民教育における「正義」を「時代遅れ」とする大正期における価値体系の変容があった。また、猿によって傷害を受けた蟹の「事実」が立証不可能だったことにより、客観的な証拠により「事実」を形成する近代法という体系の力学を、それ

に無自覚な「読者」に知らしめたのである。即ち、「主犯蟹」が「死刑」に至る「事実」の証拠を「怪訝の念を持つ」であらう「読者」の前に列挙し、「お伽噺」の「サルトカニ」の「事実」を「猿蟹合戦」の中に照らし出すことにより、語り手は「お伽噺のみしか知らない読者」に「センチメンタリズム」ではない現実的な眼の付与を試みたのである。芥川「猿蟹合戦」は、蟹を例としながら、証拠次第によって如何様にも「事実」を作り変え、時代の倫理観にそぐわない者を断罪する、法が支配する大正期の「事実」をアイロニカルに描き出した作品と言えよう。

三

蟹の仇討を有罪事件へと塗り替えた法だけではなく、「輿論」もそれを認めることなく、

その上新聞雑誌の輿論も、蟹に同情を寄せたものは殆ど一つもなかつたやうである。蟹の猿を殺したのは私憤の結果に外ならない。しかもその私憤たるや、己の無知と軽率とから猿に利益を占められたのを忌妬しがつただけではないか？優勝劣敗の世の中にかう云ふ私憤を洩らすとすれば、愚者にあらずんば狂者である。——と云ふ非難が多かつたらしい。

と、痛烈に蟹の仇討を「非難」し、「己の無知と軽率」とに端を発する「私憤」に過ぎない愚行と判断した。美談の仇討を「愚者にあらずんば狂者」の行為へと転倒させてしまう同時代の倫理観が、「優勝劣敗」という言葉が象徴するように、ダーウィン進化論を理論と

する社会進化論に裏打ちされた資本主義の時代を背景としていることは想像に難くない。

『近代思想十六講』^③にて、進化論は「生存競争に打克つて、生存を全うし得るには、その敵を亡ぼし、その周囲の自然に順応する力を有たねばならぬ」ためのものであり、「之に反し、何等の利点をも有たぬものは、常从他から圧迫され続けて遂に滅亡してゆく」と説かれている。そして、「進化」といふ言葉は、決して生物学上のみの言葉でない」と言及されるように、ダーウィンが『種の起源』の中で提示して見せた「自然淘汰」の作用がもたらす「優勝劣敗」の「生存競争」という自然界の連鎖の体系を、人間界の事象に援用した社会進化論の観点から、「優勝劣敗」というタームは帝国主義や資本主義の原理としての側面を強めて行つた。例えば、加藤弘之が天賦人權論を駁して「吾人々類體質心性ニ於テ各優劣ノ等差アルコト果テ疑フヘカラス」として「優者力常ニ捷ヲ獲テ劣者ヲ圧倒スルコト即自然淘汰ノ作用生スルハ是レ亦決シテ免レサル所ニシテ是レ即所謂優勝劣敗ナリ^④」と述べているように、人間社会における「優勝劣敗」を前提として「社会」と「国家」を同列のものとして語る加藤の論理は、明治国家の形成過程に深く刻印され^⑤、進化論は大日本帝国の国際社会への編入を可能とする論理として用いられた。即ち、「万物法ノ一大定規タル優勝劣敗ノ作用^⑥」により国民思想は増強され、国民と「国家」との関係性を形成するナショナリズムと関連した国定教科書掲載の「サルトルカニ」と共に機能したのである。そうした社会進化論を背景とした西洋列強による植民地支配や成金の登場などを経験した当時において、善が悪を挫くという勧善懲

悪の図式は、強者が弱者を挫くという「生存競争」の図式の中へと形を変えながら滑り込んで行く。帝国主義を根幹に据え、資本主義を謳う「国家」というグランドデザインの土に成り立つ「新聞雑誌の輿論」や、「公権」と裏で繋がった「識者」などの「名士」たちが形成する社会であつたからこそ、それに準じない蟹は自らの「無知と軽率」とにより「生存競争」に敗れた劣者と見做され、仇討は「私憤」を晴らすための愚劣な行為として批判されたのである。故に、「名士」たちはそれぞれの立場から蟹の非を口にし、「不賛成の声」を挙げる。

① 商業会議所会頭某男爵の如きは大体上のやうな意見と共に、蟹の猿を殺したのも多少は流行の危険思想にかぶれたのであると論断した。そのせぬか蟹の仇打ち以来、某男爵は壮士の外にもブルドックを十頭飼つたさうである。

② 大学教授某博士は倫理学上の見地から、蟹の猿を殺したのは復讐の意志に出たのである、復讐は善と称し難いと云つた。

③ 社会主義の某首領は蟹は柿とか握り飯とか云ふ私有財産を難有がつてゐたから、白や蜂や卵なども反動的思想を持つてゐたのであらう、事によると尻押しをしたのは国粋会かもしれないと云つた。

④ 某宗の管長某師は蟹は仏慈悲を知らなかつたらしい、たとひ青柿を投げつけられたとしても、仏慈悲を知つてゐさへすれば、猿の所業を憎む代りに、反つてそれを憐んだであらう、あゝ、思へば一度でも好いから、わたしの説教を聴かせたかつたと云つた。

「商業會議所会頭某男爵」は資本主義の在り方に反する蟹を資本家の立場から、自由競争を否定する社会主義の「危険思想」に侵された法外の者と見做し(①)、一方で「社会主義の某首領」の側から見ると、蟹は否定されるべき「私有財産」に拘泥した者として映る(③)。そして、それに加担した「白や蜂や卵なども反動的思想」を抱いていたと考え、大正9年2月の八幡製鉄所争議の際に「国粋会の抜刀隊が労働幹部を襲撃」して鎮圧し、社会主義などの外来思想の一掃を企てた国粋会からの回し者として蟹を危険視した。

また、「大学教授某博士」は蟹の「復讐は善と称し難い」と述べ、その「意志」が倫理上の「善」と結びつか否かを問題として語る(②)。こうした「倫理学」は「人格の完成、自我の実現に絶対的価値」を認め、「誠意」を絶対的善として普遍的に捉えることにより、偏知偏理的説明をしたカントの「倫理学」を下敷きとする。それを批判する立場から中島徳蔵は次のように述べる。

然らば、誠意とは何んなものかと云ふと、勿論直覚的に、誰にでも分るけれども、カントは更に其の当体を説明していふ、其は純粹意志である、即ち快樂とか利益とか、経験的の刺激に依て呼び起されない、さう云ふ不純物を少しも混入しない意志、詰り理性そのもののみの要求を純粹に其中に含んで居る意志である。

仇討が倫理上の「善」と結びつく「純粹意志」に拠らず、「復讐」という「不純物」が混ざった「意志」であることから、「誠意」の行為とは認められないとする「倫理学」の見地から見ても、蟹の行為の正当性は認められることはない。

そして「某宗の管長某師」は仏教者としての立場から、蟹の仇討が猿を憐れむ「仏慈悲」の欠如に起因する凶事と捉えた(④)。ここで「某宗の管長某師」即ち仏教徒が、天皇制と国家神道による国民統合を目指す祭政一致国家樹立のために、廢仏毀釈による〈近代〉化の波を受け、経済的基盤の損失を経験した立場にあったことには留意が必要である。そこで台頭したのが日蓮主義により、日露戦争後の天皇を中心とする国家主義の中へと仏教を体系化し得た国柱会を中心とした日蓮宗一派であった。田中智学が大正11年1月に創立した国性文芸会を「只現代に尤も乏せる国体精神を、文芸に託して発揚せんと思ひ立ちたる」ための運動と述べているように、国体精神による秩序Ⅱ国家主義を負うことにより仏教は〈近代〉化を迎えた。それを踏まえると、「某宗の管長某師」の言葉も抽象的なものではなく、〈近代〉化を為し得た(と信じる)側から見た、それから逸脱する蟹への同情として読みとることができる。

以上、①～④の「名士」の言葉から分かることは、いずれもが〈近代〉以降に生じた、あるいは変化を余儀なくされた立場の者からの批判と言うことである。そして、これら四つの立場から見ても、蟹はそこどこにも属すことはできず、各々の立場から蟹の仇討は「不賛成」と声を揃えて「非難」されざるを得ない。「公権」と絡んだ「輿論」やそれに関連する者から見た時、語り手が重視する法的「事実」とはまた異なる視点からも、蟹は〈近代〉の外に置かれた存在となる。同様に、個の肥大化を生じた資本主義社会の「優勝劣敗」の体系において、「私憤」に端を発する利害関係の問題から猿に義憤を覚えたに過ぎない「愚者」と見られたのが、「酒家兼詩人の某代議士」

である。

さう云ふ中にたつた一人、蟹の為に氣を吐いたのは酒豪兼詩人の某代議士である。代議士は蟹の仇打ちは武士道の精神と一致すると云つた。しかしこんな時代遅れの議論は誰の耳にも止る筈はない。

蟹に「武士道の精神」を見出し、その為に「氣を吐く」ことが「弱者、劣者、敗者に対してに恕なるは、賛して武士の美德となす所なりき²³⁾」という「武士道の精神」に適つていと思ひ込む、時代に釣り合つた眼を持てない「センチメンタリズム」の体現者として「某代議士」は語られている。そして「蟹の仇打ち」に賛同しない「輿論」に反して、仇討に「武士道の精神」を見出し、「蟹の仇打ちは武士道の精神と一致する」と述べた「某代議士」の見解は、語り手により世の理を超越した「酒豪兼詩人」の世迷い言のような「時代遅れの議論」と撥ね退けられてしまふ。「優勝劣敗」の時代の中に立てば、「武士道の精神」の高揚を口にすることは「時代遅れ」以外の何ものでもない。しかし、日露戦争後に国民思想涵養のために「武士道の精神」が利用されてきたことを踏まえれば、「時代遅れの議論」という言葉は未だに前時代的な感覚を固持する者への批判としての側面を持つようになる。

先述したように、明治6年の「復讐禁止令」以降、仇討は非（近代）的な蛮行として禁止され、親の仇を裁く権利は「公権」へと譲渡された。そこに「サルトカニ」が（近代）の枠から外れた「お伽噺」へと変容を遂げた原因がある。しかし、「サルトカニ」に見られる孝を皇室への忠へとすり替えることにより、「武士道の精神」は忠

君愛国を示す国民思想として人々を涵養し、「サルトカニ」は日本の対外膨張を支えるべく日露戦争後のナショナリズムと強く関連した教育の中で利用された。かかる日露戦争後の前時代的な思想を反映し、同時代の倫理観にそぐわないために、「某代議士」の言葉は「時代遅れの議論」として聞き入れられなかったのである。²⁴⁾更に「新聞のゴシップ」によって「数年前、動物園を見物中、猿に尿をかけられたことを遺恨に思つてゐたさうである」と、「某代議士」が猿に対する「私憤」から蟹を援護したことが暴かれ、「武士道の精神」——日露戦争頃の明治期の人々を規律してきた理——は「偽」へと転倒する。それにより「某代議士」は蟹と同様に「私憤」に駆られ、「センチメンタリズム」に偏つて「事実」を見失つた「愚者」にあらずんば狂者の一人となり、「読者」にとつての反面教師として語られてしまつたのである。

そして、蟹の死刑に直接関わりを持った「判事」以下の者たちは、その処刑後に「天国」を夢に見る。

天下は蟹の死を是なりとした。現に死刑の行はれた夜、判事、検事、弁護士、死刑執行人、教誨師等は四十八時間熟睡したさうである、その上皆夢の中に、天国の門を見たさうである。天国は彼等の話によると、封建時代の城に似たデバアトメント・ストアらしい。

蟹の「死刑」を「是なり」とした「輿論」を象徴するかのように、「悲しい蟹の運命」を「氣の毒」と思う素振りを見せることもなく、「死刑」を法に従つた当然の結果と捉える点に、「情」よりも理に従うことを良しとする公権執行者たちの態度を看取することができる。

この「国家」維持の体系を下支えする人々の夢の中に現れた「天国」が、「封建時代の城に似たデパートメント・ストア」即ち「近代」化を装った「封建時代」を示すように、蟹の仇討の正当性を認めることのできない法に縛られた現状よりも、「情」によってそれを認めることのできる環境を「天国」として夢見ていることは看過できない。それは現実における法治国家としての「近代」とは相反するからこそ「天国」なのであり、夢の中でのみ実現可能な社会の在り方に他ならない。かかる夢を「公権」を担う側の人間が職務を全うした後に見ることは、近代法を絶対として構成された「国家」が内部から綻び、その在り方に幾許かの疑問が生じ始めた状況を示しているように思われる。

一方、①④の「名士」たちはかかる夢を見ることもなく、「近代」の体系に疑問を抱かないままに、その中に絡め取られてしまっている。「蟹蟹合戦」において、「一貫して『輿論』や『名士』たちは蟹を擁護しなかったが、法に則した『事実』を語ろうとする語り手もまた、蟹を擁護した語りをすることはない。しかし、『封建時代』のような言動を取る蟹や『某代議士』を『近代』の枠の外へと追い遣り、自らは『近代』化し得たと盲目的に信じるこれらの人々もまた、時代に対して冷静な眼を持つ語り手にとって批判の対象となっているとは言えないか。

そして語り手は「蟹の死は当然である」と法による「事実」を離れることなく、仇討という大正の同時代には通用しない方法で「国家」に逆らった者の末路を語り、その後の「蟹の家庭」が行き着いた「近代」における悲劇の繰り返しに「読者」が陥らぬことを説く。

そのために「輿論」を形成することもなく、法的「事実」を顧みることもないまま、蟹と同様に「センチメンタリズム」に浸る「読者」に「君だちも大抵蟹なんですよ」と苦言を呈しながら、「事実」を作り出す「天下」に殺された蟹と何ら変わらないその姿に同情し、迷妄を解くべく「サルトルカニ」は用いられたのである。

では、「公権」に反抗し、罰せられた者の、その後の例として語られた「蟹の家庭」は何を意味するのであるうか。

四

「主犯蟹」の死刑後、その「家庭」は以下のような末路を辿る。

蟹の妻は売笑婦になつた。なつた動機は貧困の爲か、彼女自身の性情の爲か、どちらか未だに判然しない。蟹の長男は父の没後、新聞雑誌の用語を使ふと、「翻然と心を改めた。」今は何でも或株屋の番頭が何かしてゐると云ふ。この蟹は或時自分の穴へ、同類の肉を食ふ爲に、怪我をした仲間を引きずりこんだ。クロボトキンが相互扶助論の中に、蟹も同類を助ると云ふ実例に引いたのはこの蟹である。次男の蟹は小説家になつた。勿論小説家のことだから、遊蕩の外は何もしない。唯父蟹の一生を例に、善は悪の異名であるなどと、好い加減な皮肉を並べてゐる。三男の蟹は愚物だつたから、蟹より外のものになれなかつた。

「死刑」に処せられた父蟹と同様に、「愚物」であるが故に「蟹より外のものになれなかつた」「三男の蟹」以外、「蟹の妻」は「売笑婦」「蟹の長男」は「或株屋の番頭」「次男の蟹」は「小説家」

となつて「父蟹の一生」を文として売ることにより「優勝劣敗の世の中」を生き抜いて行くこととなる。

「蟹の妻」が選択した「売笑婦」は、「娼妓解放令」(明治五年太政官布告第二百九十五号)や明治26年の娼娼へと至る上毛青年連合会による娼妓運動の煽りを受けた「娼妓取締規則」(明治三十三年内務省令第四十四号)の発令、大正5年の改正強化を経て、第一次大戦後には「今や其の罪惡と戦はんが為に國際連盟の問題として、全世界の力を挙げて之に当らねばならないような実情にまで立至つてゐる」と、人権問題と関連して取り上げられていた。また、こうした問題の背景には、徳富蘇峰が「虚栄世界、肉欲世界、放縱世界の犠牲者」から解放された「新しき婦人」に求めた「国家」を支える婦人像があつた。

婦人は家庭の為に、否な家庭を透して、国家の為に、献身的精神を発揮せよと云ふのみ。人或は忠君愛國の教育は、男子に必要にして、婦人に切実ならずと云ふ者あり。是れ婦人の勢力を、無視したる没眼児の見のみ。吾人は寧ろ婦人の徳育には、忠君愛國の精神を涵養するに、最も重きを置かんことを望む。

ここで蘇峰は「忠君愛國の精神」の涵養により「家庭」を介して「国家」を支える意識の獲得を婦人にも求め、天皇を中心とした一統国として、〈近代〉化された「国家」としての「国是」を整える必要を訴えた。かかる理想的な婦人像を重ねると、「国家」の一翼を担うことから外れた「売笑婦」として生きることを選んだ「蟹の妻」は、「識者」や為政者らが作り上げてきた「国家」が求める国民の在り方から外れた者の姿を描いていることが分かる。語り手は崩壊

する「蟹の家庭」により「国家」の思惑から外れた者の姿を紡ぎ出し、法的「事実」に従つて「公権」に逆らつた場合のその後を「読者」に示して行く。

日露戦争以降、青年たちに魅力的に映つた「或株屋の番頭」となつた「蟹の長男」の姿もまたそれを表している。「蟹の長男」はクロボトキン『相互扶助論』に「蟹も同類を勉めと云ふ実例」として引かれた蟹であることが語られる。該当箇所を『相互扶助論』より引用する。

又私は、一八八二年にブライトン水族館で、あの大きなモルツカ蟹(Limulus)が、其の不恰好な身体にも似合はず、まさかの時にはどれ程骨を折つて其仲間を助けるかと云ふ事を見た。何かの拍子で一疋の蟹が水槽の隅の方には鉄の格子が嵌つてゐるので、それが邪魔になつて、益々起き上がれない。すると其の仲間共が助けに來た。(中略)もう二疋の蟹を連れて來た。そして此の新手の力を借りて、又もや其の憐れな仲間を持ち上げては突立たせようと試みた。私達は二時間あまり此の水族館を見物してゐたのであるが、帰りがけに再び其の水槽の所を通じて見ると、まだ其の救助が続けられてゐた。

ダーウインが示した生存競争の原理に対して、それ以上に自然界では「相互支持、相互扶助、相互防御が同一種の或は少なくとも同一社会の動物間に行はれてゐる」という一例として、「モルツカ蟹」の相互扶助の様が引かれる。「蟹の長男」が「怪我をした仲間」を「自分の穴」へ引きずり込んだという点では相互扶助は成立し、「蟹も同類を勉め」という『相互扶助論』と一致する。しかし、その目

的が「同類の肉を食ふ為」であると語られた時、他を食い物にしてまで生き抜かねばならない生存競争に根差した「長男の蟹」の姿は、相互扶助という理想論では片付けられない熾烈な「優勝劣敗」の世を生き抜く人間の实像へと結びつけられ、「読者」は「お伽噺」の世界から現実へと引き戻されざるを得なくなる。即ち、「蟹の長男」は相互扶助を逆手に取った生存競争に対する「皮肉」に他ならず、生存競争という言葉を超えた過酷な生活の「事実」を写しているのである。

そして「次男の蟹」は「輿論」が「愚者にあらずんば狂者」と見なした「父蟹の一生」から、時代や立場により善悪の判断が転倒する危険性を帯びることを「好い加減な皮肉」として書き立て、「父蟹」を食い物にして生きて行く。この「小説家」となった「次男の蟹」が売文業としてものした文学は、蘇峰が前掲書にて忠良な青年を毒す「病的文学」として批判したものであり、そうした文学を志す青年の増加が問題視されていた。この「帝国の使命を奉行するに足るの、志趣、教養を与ふる」ものではない文学に耽り、「遊蕩の外は何もしない」でいる生産性のない「次男の蟹」もまた、「国家」のために尽す国民を理想とする為政者たちが設けた「近代」の枠から逸脱した者として描かれている。即ち、「蟹の家庭」は「国家と個人とを調和し、疎通し、紹介し、抱合するに於て、欠く可らざる機関」としての機能を欠き、明治以降、忠君愛国を合言葉に一統国として「近代」化を進めてきた「国家」の理想とする「近代」から逸脱することにより、体たらくな没落を招いた、法支配の陰に落ちた場合の「事実」を「読者」に物語っているのだと言えよう。だか

らこそ、蟹のような過ちを繰り返すな、と語り手は説くのである。

また、公権執行者たちが夢を見た「封建時代の城に似たデバアトメント・ストア」のような「天国」に、急速な「近代」化を進めた日本の綻びが露見しているように、「猿蟹合戦」が「近代」の一応の帰結を見た第一次大戦を経て、その意味を再考する時期に差し掛かっていた頃に描かれていることを踏まえれば、近代法に抵触した者が罰せられた後の「事実」を説く中で描かれた「蟹の家庭」の有り様は——それに「読者」が気付くか否かは別問題として——寓意を含んだ絵として捉えることができる。即ち、「サルトカニ」の仇討が「情」には流されない近代法の論理により構築された「国家」においては意味を為さないという文脈と、「サルトカニ」をナショナリズムと関連させながら「国家」への帰属意識の高揚と国民思想の涵養により「近代」化を進めてきた文脈とが止揚して成立する為政者らが思い描いた「近代」のカリカチュアとしてのそれである。

しかし、本稿は芥川の社会主義への接近を問題としようとしている訳ではない。日露戦争後に昂った国民思想や帝国主義を受容し、その背景にあった資本主義の発達を追い風に作り上げられてきた「近代」が、第一次大戦を経た大正の時代相と齟齬を来たし、それまでの「事実」が「偽」へと転倒し始めている状況を、帝国主義でもなく、資本主義の理にも拠らない「蟹の家庭」の様によって芥川が描き出していることを問題として指摘しておきたいのである。

如上の「蟹の家庭」において、「愚物」であった「三男の蟹」のみが父蟹と同様の生涯を辿ることとなる。それは「次男の蟹」が「善は悪の異名である」と善悪の判断に普遍性が無いことを述べたよう

に、時代の推移や立場の変化により、容易く価値観の転倒が起こり得ることに無自覚な者が「天下の為に殺される」という〈近代〉の悲劇への痛烈な「皮肉」を意味している。語り手の「愚物」という評価は「蟹」や「三男の蟹」を介して、「センチメンタリズム」に浸り、自らが置かれた状況を顧みず「事実」に盲目的になつて「読者」へと跳ね返る。そして語り手は、蟹のように「センチメンタリズム」に過ぎない「読者」に「君だちも大抵蟹なんですよ」と「皮肉」を放ちながらも、「読者」に同情することを禁じ得ない。吉田精一⁽²⁾は「猿蟹合戦」を「作者自身が高見の見物をしてゐる為、その風刺も胸に響くものではない」と評価したが、語り手は「読者」を突き放した「高見の見物をしてゐる」位置には無い。寧ろ「読者」に寄り添いながら「事実」を語っている。だからこそ小説末尾の「皮肉」は「読者」の胸に響くのである。

以上見てきたように、猿との戦いの後に蟹が「天下の為に殺されること」を描いた芥川「猿蟹合戦」は、「事実」よりも「情」を重視する「センチメンタリズム」を抱く「読者」に対して、「情」を切り捨てることにより〈近代〉を構築した法の支配力を知らしめ、大正期の〈近代〉を無自覚に生きる者が逢着する末路を蟹や「蟹の家庭」の崩壊を例として、「好い加減な皮肉」——苛烈なパロディではない「皮肉」——を投げ掛けた小説として機能している。それは裏返せば、大衆雑誌に掲載されるパロディ作品が、原典を書き換えることにより生じる、読み物としての単純な面白みを持つパロディイとしては機能しても、それが内包する批評性が機能しないことを芥川が自覚していたことを意味していると見えよう。だからこそ、

パロディ化により何かを批評するというよりも、教科書掲載されてきた美談の「サルトカニ」を用いることにより、パロディの意味を解しない「お伽噺しか知らない読者」に分かりやすく「事実」を語る体裁が選択されたのではないだろうか。即ち、「事実」を「読者」に説くという形式は、批評に対して盲目的になつてしまつて「読者」を介して、パロディ作品による批評の有効性、そしてパロディ化ということ自体に対するメタレベルでの批評を孕んでいるのである。そこにパロディ作品として「猿蟹合戦」を機能させることなく、「事実」のメタファーとして用いた芥川の意図があつたのではないだろうか。

注

(1) 「婦人公論」大正12年3月

(2) 大正7年〜昭和8年にかけて使用された。「サルトカニ」は第二期国定国語教科書（明治43年〜大正6年）にも繰入りで掲載されていたが「サル ト カニ カキ ノ タネ ニギリメシ」と一頁だけの掲載であった。それが物語形式で掲載されるようになったことの背景には、第一次大戦を経て海外から児童中心主義の教育思想が流入し、新教育運動が盛んになりつつあつた状況がある。

(3) 海後宗臣・仲新編『近代日本教科書総説 解説篇』（昭和44年7月・講談社）を参照。

また、第二期国定教科書の特色を同書は次のように述べる。

第四の特色として、皇室を尊び、忠義の心を説く教材がとられている。（中略）各巻の第一課には、かならず、皇室あるいは日本精神に關

する教材を掲げ、各巻ごとに、国家あるいは主君に忠誠を尽くした人々を加えている。それもわが国の人ばかりでなく、中国、西洋からも取材している。(中略) 以上あげた五つの特色の多くは、日露戦役勝利後、一段と国家主義的傾向が高まり、国民感情と伝統が尊ばれ、近代国家として発展するため、軍事と生産が強調されたことによるとみられる。

日露戦争後の教育が国家主義に基づく軍事と生産、国力の増強を計る「国家」の戦略に沿う形で、皇室への忠や親への孝から「国家」への帰属を意識させるために、教科書では古典教材の重視、忠義の心を説く教材の採用が行われていた。

(4) 今川恵美子「猿蟹合戦の原話と伝播」(『女子大国文』昭和44年2月)は、擬軍記型の「猿蟹物語」が封建社会の「表面的平和精神」を背景に、娯楽本位であった話型が流行した合戦物に伴う仇討ちの形式に沿うように改変され、それに勧善懲悪思想の道德面を強調することによって仇討譚の「猿蟹物語」として流布したことを指摘する。

(5) 杉森孝次郎「新時代が必要とする教育方針」(『改造』大正9年9月)(6) 「サル・カニ合戦」の仇討物語を抹殺 脅迫、復讐は童心を蝕むと新学期から読本改正」(『読売新聞』昭和8年9月11日)

従来、その残酷性が問題視されてきた「サルトカニ」は、「サル ハ、トウトウ、ジブン ガ ワルカッタ ト アヤマリマシタ。カニ ハ、ユルシテ ヤリマシタ」(『小学国語読本 巻二』(昭和8年1月・東京書籍株式会社)と、悪事を認め反省する猿とそれを許す蟹の寛大さを描く物語へと改変された。しかし、「カタキウチ」が「サル ヲ コラスコト」という表現へと程度が和らげただけであり、その根底にある勧

善懲悪の枠組みは変えられることなく善Ⅱ蟹／悪Ⅱ猿という明確な区分けは依然として存在したままであった。

(7) 吉田俊彦「猿蟹合戦」解説(菊池弘／久保田芳太郎／関口安義編『芥川龍之介事典』昭和60年12月・明治書院)

(8) 山田篤朗「猿蟹合戦」解説(志村有弘編『芥川龍之介大事典』平成14年7月・勉誠出版)

(9) 西原千博「猿蟹合戦」解説(関口安義／庄司達也編『芥川龍之介全作品事典』平成12年6月・勉誠出版)

(10) 注5に同じ。

(11) 『明治六年法令全書』明治22年5月・内閣官報局

(12) 「法律の生命」(『改造』大正12年3月)

(13) 「第九講 ダアキンの進化論」(中沢臨川／生田長江編『近代思想十六講』大正4年12月・新潮社)

(14) 『人権新説』明治15年10月・谷山楼

(15) 佐藤太久磨「社会進化論」と「国際民主主義論」のあいだ——加藤弘之と吉野作造——(『立命館大学人文科学研究紀要』平成23年3月)

また、同論にて加藤弘之の社会進化論から吉野作造の国際民主主義論への転機として第一次大戦を位置付け、「帝国主義ないし植民地主義の自明性が解体し、新たに「国際協調体制」が模索された」と指摘されているように、第一次大戦は国内外の既存の価値観の変容を促し、従来の国際秩序の改編を迫るものであった。

(16) 注12に同じ。

(17) 「読売新聞」大正9年2月27日

(18) 「カントの倫理説批判」(「ヴァント倫理学綱要」 大正10年6月・丙午出版社)

(19) 田中智学『師子王戯曲集第一集』 大正12年3月・国性文芸会

(20) 新渡戸稲造著／櫻井彦一郎訳『武士道』 明治41年3月・丁未出版社

(21) また、「酒豪兼詩人の某代議士」の言葉のような国民思想涵養を匂わせる教材の「サルトカニ」は、児童の自発的な学習を重視する児童中心主義の教育が新教育運動として花開こうとしていた当時において、まさに「時代遅れの議論」だったと言える。第三期国定国語教科書『尋常小学国語読本 巻一』にも掲載された「サルトカニ」を教育の場で無意識の裡に受容しながら、「お伽噺」の「偽」の美談として認識してしまっていた同時代の「読者」の迷妄に対して、法の論理に基づいた「事実」を突き付けようとするところに芥川「猿蟹合戦」の国民教育に対する批評性を認めることもできよう。

(22) 氏原佐蔵『可笑婦及花柳病』 大正15年7月・警察協会

(23) 「大正の婦人」(『大正の青年と帝国の前途』 大正5年10月・民友社)

(24) 日露戦争も終結し「世間」帯が何となくお祭のやうに景氣付いて居た四十年の四月の半ば頃」を舞台とする谷崎潤一郎「暫間」(『スバル』 明治44年9月)の「兜町で成金の名を響かせた榊原と云ふ株屋の若旦那」や、島崎藤村「家」(原題「犠牲」)、『中央公論』(明治44年1月)にて「兜町」で「相場師として立たうと決心した」正太の姿にもうかがえるように、当時の青年にとって株取引は魅力的なものであった。それは正太の「実叔父さん達と、私とは、時代が違ひます。」という言葉にも象徴的なように、封建制度を色濃く残しながら(近代)化を進めた世代と、そうではない世代が見た(近代)の在り方の違いを示している。そうであれば、「蟹

の長男」もまた新しい(近代)と、そこに生きる青年の在り方を示しているとも言えよう。

(25) クロボトキン著／大杉栄訳『相互扶助論——進化の一要素——』 大正6年10月・春陽堂

(26) 小山東助『社会進化論』(明治42年2月・博文館)では、「ダルウキン説に疑問を有し、生物学上の事実に基づいて生存競争と正に相對照すべき生物進化の原則を提唱」した「積極的批評の代表者」としてクロボトキンを挙げる。

(27) 「国是不徹底」(『大正の青年と帝国の前途』前掲)には、次のようにある。

若し果して我が大正の青年をして、世界的大舞台に立ち、帝国の使命を奉行するに足るの、志趣、教養を与ふるものたらしめは、吾人違言なき也。但た事實は此の如くならざる也、否な寧ろ其の反対たる也。日本の現時の文学は、或る除外例の他は、教育が十日溫めたる所を、一日之を冷却せしめて余りある也。

(28) 「健全なる家族制度」(『大正の青年と帝国の前途』前掲)

(29) 「階級文芸」(『芥川龍之介』 昭和33年1月・新潮文庫)『吉田精一著作集第一巻』 昭和54年11月・桜楓社)

【付記】「猿蟹合戦」の本文の引用は初出に拠り、旧字は適宜新字に改めた。また、引用文中における傍線・波線・記号は稿者による。